

# 江戸の植木屋と花屋

—柳沢信鴻著『遊宴日記』より—

## Garden tree shops and flower shops in Edo : From the Diary of Yanagisawa Nobutoki

飛田 範夫  
HIDA Norio

キーワード：江戸時代、柳沢信鴻、遊宴日記、植木屋、花屋  
Keywords : the Edo period, Yanagisawa Nobutoki, Enyu Nikki,  
Nikki, garden tree shops, flower shops

Garden tree shops and flower shops of Edo (Tokyo) in 18th were written by Yanagisawa Nobutoki in his diary "Enyu Nikki".

Those shops where Nobutoki bought plants to make the garden in his residence Rikugien at Edo sold many kinds of trees and flowers.

Nobutoki described that those shops had sold many plants which visitors wanted to decorate their room or make their garden.

In Edo period nurserymen produced new varieties of garden plants which anyone can't get now.

Those shops existed at many places in Edo. For example, those were at Dosaka, Yushima and Sendagi which are belonged to Bunkyo Ward today, and at Hirokodoji, Rokuamida, Kubifuri-zaka in Taito Ward.

### はじめに

大和郡山藩の第2代藩主だった柳沢信鴻（のぶとき、1724 - 1792）は、安永2年（1773）5月23日に江戸駒込の下屋敷六義園（りくぎえん、東京都文京区本駒込6丁目）に移り、同年10月3日に引退した後も、死去するまでここで過ごしている。六義園は第5代将徳川綱吉の側用人〔そばようにん〕として活躍した柳沢吉保（よしやす、1658 - 1714）が造営したもので、信鴻は吉保の長男吉里の二男で吉保の孫にあたる。

『遊宴日記』は安永2年から天明4年（1784）まで、信鴻が日々のことを綴った日記で<sup>1)</sup>、六義園での日常生活や交友関係、物見遊山などについて克明な記載がされている。この日記からは、当時の六義園の様子もわかることから、庭園についてはすでに研究されている<sup>2)</sup>。本稿では、六義園内に植栽した植物を、どこの植木屋・花屋から入手していたかを探ることによって、当時の江戸の植木屋・花屋の分布とその売買の状況を明らかにしたい。

### 1. 江戸の植木屋・花屋の所在地

六義園内で作庭を行なった際や参詣などに出かけた折に、信鴻はさまざまな場所で樹木や草花を買っている。信鴻が寄った植木屋と花屋についての記事をまとめると、表1・2・3のようになる。

植木屋という表記が多いが、安永2年（1773）12月18日条では「うへ木みせ」、安永4年11月9日条では「樹屋」と書き、安永5年1月25日条では「植木や」、安永10年9月24日条では「植樹屋」となっている。「樹屋」の読み方は「きや」となるわけだが、本稿では「植木屋」に統一することにする。

これらの植木屋・花屋について、以下に地域ごとに詳細を見ていくことにしたい。

#### （1）駒込・動坂・千駄木・湯島・根津・本郷〔文京区〕

##### 1）駒込

信鴻は天明元年（1781）7月21日に、門前の植木屋庄八と立ち話をしている。現在の管理事務所がある南東側が当時も正門だったと考えられるので、門前側の庄八は本駒込2丁目あたりになる。馴染みだったが、記録上で購入がほとんどないのは、小規模な植木屋だったからだろうか。

天明3年4月8日には、吉祥寺（本駒込3丁目に現存）の斜め前に位置していた円通寺脇の植木屋を訪れている。位置的には六義園から南東500mほどになるから、この植木屋は門前に近かったことになる。

##### 2）動坂

文京区の地域内では、信鴻が訪れた回数は動坂が圧倒的に多い。「東駒込辺絵図」（尾張屋板、1854年）には<sup>3)</sup>、吉祥寺の東裏の道に「トウサカト云」とあり、道の両側に「植木や多シ」と記されている。現代の区分では坂の西側が本駒込、東側が千駄木〔せんだぎ〕になっているが、ここでは動坂として一括して扱いたい。この坂に沿って多くの植木屋と花屋が並んでいたらしい。信鴻は花屋の治衛門の店をよく訪れ、休憩したりして

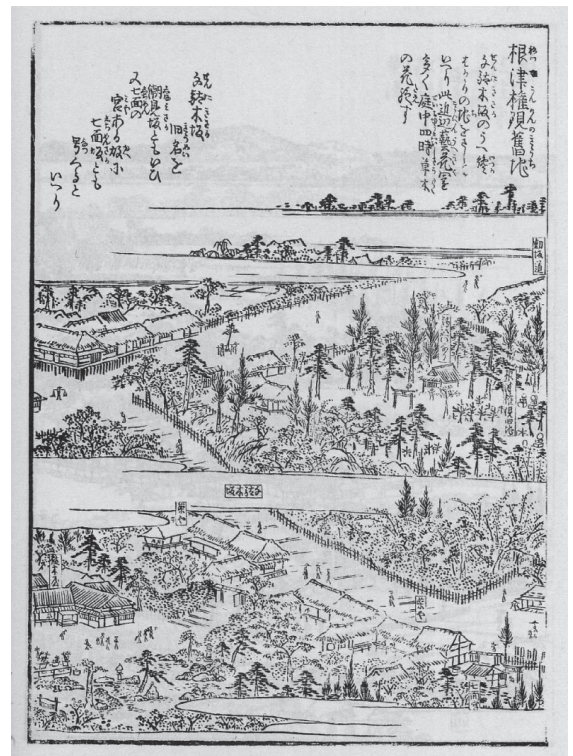


図-1 団子坂の植木屋（『江戸名所図会（5）』より）

表－１ 駒込・動坂・千駄木・湯島・根津・本郷の植木屋・花屋

所在地・店名 [( ) は経由地]	現 在 地	年 月 日	購入した樹木・草花
表門前庄八 門前植木屋庄八 植樹屋庄八 (養源寺から) 円通寺脇植木屋	文京区本駒込	安永 3 年 (1774) 9 月 30 日 安永 10 年 (1781) 7 月 21 日 天明 3 年 (1783) 10 月 5 日 4 月 8 日	(菊を見る) (中風になったと聞く) とふたん躑躅 (ドウダンツツジ) (植木を見る)
動坂花や  動坂花屋 池端通り動坂花屋 (中町から) 動坂花や (勤善院から) 動坂花屋 (浅草から) 動坂花屋 千駄木通り動坂上花屋 (千駄木から) 動坂花屋 動坂花や治衛門 (池端町) 治衛門 (法住寺から) 動坂植木屋治衛門 (千駄木から) 植樹屋治衛門 (富士前へ) 動坂樹屋 動坂樹や (富士前へ)  動坂植木屋 動坂樹屋  動坂植樹屋 動坂の佐竹脇の植樹屋 (千駄木から) 動坂植木屋 (浅草参詣して) 動坂植木屋 動坂上	文京区 本駒込・千駄木	安永 4 年 (1775) 9 月 5 日 安永 5 年 (1776) 8 月 17 日 安永 6 年 (1777) 3 月 23 日 12 月 1 日 安永 7 年 (1778) 12 月 14 日 安永 8 年 (1779) 1 月 27 日 9 月 18 日 4 月 5 日 安永 10 年 (1781) 3 月 9 日 安永 6 年 (1777) 12 月 5 日 安永 7 年 (1778) 7 月 5 日 安永 8 年 (1779) 1 月 12 日 天明 2 年 (1782) 5 月 17 日 安永 4 年 (1775) 11 月 9 日 安永 5 年 (1776) 1 月 25 日 5 月 17 日 5 月 25 日 安永 6 年 (1777) 5 月 21 日 安永 8 年 (1779) 1 月 29 日 2 月 7 日 2 月 12 日 3 月 8 日 3 月 9 日 2 月 19 日 7 月 18 日 安永 9 年 (1780) 2 月 30 日 天明 3 年 (1783) 4 月 5 日 安永 4 年 (1775) 10 月 18 日	桂花 (モクセイ) 大樹 (植木を見る) 梅棒木・毛氈楓樹 (植木を見る) (植溜を見る) 木樨 (植溜を見る) (植溜を見る) 下野花 (シモツケ)・宮城野萩 牡丹・桃 もち 2 株・木樨 1 株 (来て庭に植える) (松・植木を見る) (呼び出して梅・桜の値を尋ねる) (休む) 槇 (マキ) 2 株・榿 (カシ) 1 株 梅棒木 (さいかちの樹の値を聞く) (立ち寄る) 木樨 老木の豊後梅 (立ち寄る) 彼岸桜 もちの樹 もち 2 株 (昨日のもちの樹がよくないため) 千汐楓・大膳桜 (立ち寄る) (寄って休む) (寄って休む) 万年青樹 (ヒメツゲ)
千駄樹樹や (首振から) 千駄樹の二軒の植樹屋 (近郊散策) 千駄樹樹屋 千駄樹植木や 千駄樹樹屋 (広小路から) 千駄木植樹屋 千駄樹花や 千駄樹	文京区千駄木	安永 3 年 (1774) 12 月 11 日 安永 8 年 (1779) 2 月 19 日 3 月 16 日 3 月 26 日 3 月 16 日 安永 9 年 (1780) 2 月 30 日 安永 6 年 (1777) 7 月 21 日 安永 4 年 (1775) 4 月 19 日	「室」を見る (植木を見る) (植木を見る) 黒百合・細辛 (サイシン)・宮城野 (ハギの一種) (植木を見る) (立ち寄る) (立ち寄る) 南天 (ナンテン)
(天神「湯島天満宮」から) (湯島参詣) (湯島参詣) 西側の植木・東側の植木 湯島 (伊勢屋に休む) 湯島花や (聖廟参詣して) 伊勢屋に休む (中町通へ) (聖廟参詣して) 男坂伊勢屋に休む (女坂へ) (湯島参詣) 伊勢屋に休む (聖廟参詣して) 伊勢屋に休む (湯島参詣して) 男坂伊勢屋に休む  (湯島・聖廟参詣して) お清の店に休む (湯島参詣して) 伊勢屋に休む	文京区湯島	安永 4 年 (1775) 10 月 25 日 安永 5 年 (1776) 4 月 25 日 9 月 25 日 安永 6 年 (1777) 4 月 6 日 11 月 25 日 安永 7 年 (1778) 8 月 25 日 10 月 25 日 11 月 25 日 安永 8 年 (1779) 7 月 25 日 7 月 25 日 安永 9 年 (1780) 1 月 25 日 8 月 25 日 9 月 25 日	柊 (ヒイラギ) うへ木 寒竹・石竹 (セキチク)・花菖蒲・杜鵑花 (ホトトギス) (植木を見る) 桜・棘 (バラ?)・鉄仙花 棒松 (テッセン) 山茶花 (サザンカ) 松 (植木を見る) おもと・小菊 紅梅 (女坂植木屋から買う) (植木を見る) 草花を買う (植木を見る) 万年青草 (ハラン)・白実唐橘 (カラタチバナの一種)・番椒 (トウガラシ)
本根津 本根津植木屋 (根津通り) 権現の外の植樹や	文京区根津	安永 5 年 (1776) 6 月 18 日 6 月 18 日 安永 9 年 (1780) 4 月 16 日	桔梗 (見る) (見る)
(本郷六町目から) 鰻堤の樹や (根津参詣して) 乞食坂の花屋 (山下から) 竹町	文京区本郷	安永 6 年 (1777) 11 月 25 日 安永 8 年 (1779) 4 月 5 日 2 月 18 日	(植溜を見る) (見る) 桜 (作松も見る)



### 3) 千駄木

動坂とは離れている団子坂の周辺を、ここでは千駄木ということにする。団子坂（千駄木坂・潮見坂）というのは、駒込学園前の交差点付近から団子坂下交差点までを指している<sup>4)</sup>。

『江戸名所図会「ずえ」(5)』の「根津権現旧地」の図には、千駄木坂（団子坂）の横の薬屋の間に「植木屋」と書かれた瓦葺風の家屋があり、その前に石組を持つ園池と鉢を置いた棚が描かれている（図-1）。

安永3年（1774）12月11日に信鴻は千駄木の植木屋で、冬場に寒さに弱いものや早咲きさせる植物を入れておく温室の一種、地下に穴を掘った「室[むろ]」を見ている。「室」を持てるほどの敷地を所有する店が、団子坂の周辺には多かったということだろう。

### 4) 湯島

文京区湯島3丁目に現存する湯島天神（湯島天満宮）に、信鴻は参詣することが多かった。安永5年（1776）9月25日条によると、湯島天神の西側と東側に植木が並んでいたらしい。表1からすると、信鴻が植木や草花を買ったのは、ほとんど各月の25日に限られている。『江戸名所図会(5)』の図中に「月毎の二十五日には植木市ありて、殊更[ことさら]にぎはしく一時の壮観なり」と書かれているから、この日の植木市をねらって参詣に出かけ、植物を購入していたのだろう。

湯島天神やその南方に位置する聖廟（聖堂、湯島3丁目）に参詣した後、信鴻は天神の男坂にあった伊勢屋で休むことが多かった。伊勢屋まで花屋や植木屋に植木・草花を持って来させて、信鴻がまず見てから値段の交渉を家臣に命じ、信鴻が妥当と思う値段まで値切って買わせている。安永8年7月25日条によると、女坂の植木屋が売りに来ている。

### 5) 根津

根津は千駄木の南側に位置しているが、ここには根津権現（文京区根津1丁目）が存在していた。安永9年（1780）4月16日条によると、根津権現の外に植木屋があった。根津権現の参拝客を目当てにした店だったのだろう。

### 6) 本郷

本郷は根津の南側にあたる。安永6年（1777）11月25日に信鴻は、「鰻堤」の植木屋を訪れた時に、本郷六丁目を經由している。本郷追分から土物店[つちものだな]までの日光御成道の俗称は「鰻縄手」だったから、この付近ではないだろうか。

安永8年4月5日条の乞食坂は、「闇坂」「茶の木坂」とも呼ばれていた所で、東大農学部と工学部の間の弥生坂を途中からまがって、東大付属病院へ行く道のことになる。

また、安永8年2月18日には、信鴻は浅草から竹町に寄っている。この「竹町」は本郷竹町（たけちょう、文京区本郷3丁目）を指している。

以上からすると、本郷にもいく軒かの植木屋と花屋があったことになる。湯島は別として、駒込・動坂・千駄木・根津・本郷が一続きになって、植木屋・花屋が存在したといえるのではないだろうか。

## (2) 広小路・六阿弥陀・首振坂など[台東区]

### 1) 広小路

広小路で植木を買うことが多かったのは、浅草寺に参詣することが、習慣になっていたことによっている。「今戸・箕輪・浅草絵図」（尾張屋板、1853年）では、吾妻橋に通じる浅草寺の雷門（風雷神門）前の東西の通りを「広小路ト云」としている（図2）。『江戸名所図会(5)』によると、年の市のときには「浅草大通りおよび下谷通りともに群集す」という状況だったという。「浅草大通り」というのは、広小路を指していることになる。

広小路で安永4年（1775）3月18日に、信鴻は庭木を買っ

ている。浅草寺の祭礼が隔年の3月18日だったことからすると、祭礼見物の時だったことになる。広小路に各月の3日と8日に訪れているのは、『江戸名所図会』に「往古[むかし]は毎月三八の日このところにて市立ちしとぞ」とあるように、古い習慣が残っていたからだろう。広小路の店は道路上だったことからすると、仮設的な店舗だったことになる。

### 2) 六阿弥陀

安永6年（1777）6月18日条に「六阿弥陀」とあるのは、下谷[したや]広小路（上野広小路ともいう）の東側に位置する下谷（台東区上野4丁目付近）に存在していた常楽院を指している。

信鴻は湯島天満宮や浅草寺に参詣した際に、しばしばこの地域に寄っている。6月18日の朝の印象を信鴻は、「今日早朝ゆへ植木や甚少く」と述べているから、植木屋は仮設の売店を出していたことがわかる。

安永5年4月25日には、中町通五条天神を経て、備後前の植木屋に行っている。信鴻の時代には五条天神は、不忍池[しのばずのいけ]の南東側の瀬川屋敷（台東区上野4～6丁目）内に存在していた。「備後」と名の付く屋敷を、「小石川・谷中・本郷絵図」（尾張屋板、1853年）で探すと、加賀大聖寺藩主の松平備後守の中屋敷がある。この屋敷の前ならば、不忍池側に植木屋が存在した可能性が高い。

天明4年（1784）4月19日には、浅草の帰りに三枚橋（台東区上野）で植木を見ている。下谷広小路の三橋の東側のこの橋のたもとで、植木屋は店を開いていたのだろう。

安永7年11月18日には、「山下」で植木を見ている。「東都下谷絵図」（尾張屋板、1851年）だと、不忍池の東にあった寛永寺の黒門（南入り口）の東側部分、普門院横の空地を「山下」としている。西郷像の東側一帯（台東区上野公園）になる。

こうしてみると、五条天神・六阿弥陀・三枚橋・山下という一帯となった地域に、植木屋が店を出していたことになる。寛永寺をはじめとする寺社と、景観的にすぐれた不忍池が組み合わさり、人々が集まる行楽地になっていたのだろう。

### 3) 首振坂

安永8年（1779）2月19日条に「感応寺内谷中[やなか]通首振宇平次園中」とあるが、感応寺（天王寺）は江戸時代には現在の谷中7丁目をほとんど占めていた。首振坂とは台東区谷中の三崎[さんさき]坂のことで、文京区の団子坂下から大円寺・全生庵・永久寺沿いの坂を指している。



図-2 広小路（「今戸・箕輪・浅草絵図」（1853年）より）

表－２ 広小路・六阿弥陀・首振坂・諏訪明神・金杉町石橋・根岸の植木屋・花屋

所在地・店名 [( ) は経由地]	現 在 地	年 月 日	購入した樹木・草花
広小路うへ木みせ 広小路	台東区浅草	安永 2 年 (1773) 12月18日 安永 4 年 (1775) 3月18日 12月18日 安永 5 年 (1776) 3月27日 安永 7 年 (1778) 1月18日 閏7月3日	うす紅小梅・大株の梅・福寿草 海棠 (カイドウ)・柊 柊棒木・伽羅木 (キャラボク) 鉄せん花 (テッセン)・燕子華 (カキツバタ) (桜を買おうとしたが根が悪くやめる) (松を探す)
広小路 (黒門へ) 広小路 (黒門へ) 広小路 (観音参詣して黒門へ) (浅草から) 広小路 (中町通・女坂へ) (浅草から) 広小路 (動坂へ) (浅草から) 広小路 (浅草参詣) 広小路 風神門 (中町から) 女坂を上がる 中町通広小路 (池の端通りへ) (浅草参詣) 竹町広小路 (普門院大師参詣) 広小路		安永 9 年 (1780) 2月30日 安永 4 年 (1775) 11月18日 安永 7 年 (1778) 10月 3 日 安永 8 年 (1779) 9月18日 10月 3 日 安永 9 年 (1780) 11月 3 日 安永 8 年 (1779) 3月20日 安永 7 年 (1778) 1月25日 安永 8 年 (1779) 5月 5 日 安永10年 (1751) 4月 3 日 天明 4 年 (1784) 12月 3 日	彼岸桜立花 不明 (木を買う) (松・南天に値を付けるが売らず) 白菊・槿 松・ハツ手 南天 2 株 藤樹 (フジ) (植木を見る) 白仙翁・為朝百合・薩摩菊・姫百合 (植木を見る) (売樹を見る)
六阿弥陀の植木屋 六あみた辻 六弥陀横町 (聖廟参詣して) 六阿弥陀脇の茶屋に休む (浅草参詣して) 六阿弥陀 (中町通五条天神から) 備後前うへ木屋 (浅草) 三枚橋	台東区上野	安永 6 年 (1777) 6月18日 安永 7 年 (1778) 1月18日 2月18日 2月25日 11月18日 安永 5 年 (1776) 4月25日 天明 4 年 (1784) 4月19日	石菖 (セキショウ) 2 株 (植木を見る) 虎尾桜 不明 (木を買う) 椿松 (買わず) (植木を見る)
(風神門から) 山下 (六阿弥陀へ)	台東区上野公園	安永 7 年 (1778) 11月18日	(植木を見る)
首振阪宇平次 感応寺内谷中通の首振宇平次の園中 (浅草参詣して) 首振坂 谷中の花売り (谷中から) 浅崎 法住寺前の桜木の茶屋に休む	台東区谷中	安永 4 年 (1775) 7月17日 安永 8 年 (1779) 2月19日 天明 4 年 (1784) 4月 5 日 安永 5 年 (1776) 6月18日 6月18日 安永 7 年 (1778) 6月 7 日	(寄り、路地内の庭を見る) (松・楓に値を付けるが売らず) 岩檜 (イワヒバ)・姫菖蒲 (ショウブの一種) 荷の岩檜葉 (イワヒバ) を買う 仙翁花生華 (センノウ) 白仙翁花
諏訪明神西側茶や (青雲寺へ)	台東区駒形	安永 5 年 (1776) 3月 9 日	八入楓小樹 (カエデの一種)
(総泉寺から) 金杉町石橋向いの植木屋	台東区下谷・根岸	安永 8 年 (1779) 2月19日	(汐楓に値を付けるが売らず)
(山伏松通りから) 根岸植木や 根岸植木や二軒	台東区根岸	安永 5 年 (1776) 12月 9 日 安永 8 年 (1779) 2月19日	(つぎ分梅に値を付けるが売らず) (民家の枝垂桜 [シダレザクラ] に値を付ける)

首振坂に接して宇平次は、樹木を植えた植溜を持つ店を構えていたのだろう。安永 4 年 7 月 17 日条には、「路地内の庭を見る。泉池有、亭をかしく建て幽閑の地也」とあるので、庭園が作られていて、園池の傍らには四阿のような亭が建てられたことがわかる。

安永 5 年 6 月 18 日に信鴻は、谷中 (台東区) で花売りからイワヒバを買い、次に浅崎に寄って「仙翁花生華」を購入している。「浅崎」というのは、「谷中三崎町」(台東区谷中 2 - 5 丁目) のことと考えられる。切花ということなので、この店は花屋だろう。

安永 7 年 6 月 7 日には、「法住寺前桜木大和茶屋」で「白仙翁花」を購入している。法住寺は谷中三崎町の西側に存在していた寺院だった。

#### 4) 諏訪明神・金杉町石橋・根岸

安永 5 年 (1776) 3 月 9 日に、信鴻は諏訪明神の西側の茶屋で、「八入楓」を買っている。諏訪明神は浅草諏訪町(台東区駒形)の日光道の西側に位置していた。

安永 8 年 2 月 19 日には、総泉寺 (台東区橋場) から金杉町石橋に行って植木を見てから、根岸 (台東区根岸) に向かっている。金杉町石橋というのは現在の下谷から根岸あたりのことになる。またこの日、信鴻は根岸の植木屋 2 軒も回っている。

### (3) その他の地域 [豊島区ほか]

#### 1) 伊藤伊兵衛 [豊島区]

安永 2 年 (1773) 11 月 4 日に信鴻は、和泉門前から伊兵衛の所に行き座敷を借りて休憩してから、王子街道へ出ている。道筋を考えると、「和泉」は伊勢津藩主の藤堂和泉守の下屋敷 (豊島区駒込)、「伊兵衛」は染井 (豊島区駒込) の伊藤伊兵衛のことになる。

染井は六義園の北東に位置していて、1km ほどしか離れていない。「染井・王寺・巢鴨絵図」(尾張屋板、1854 年) には、藤堂家下屋敷の北側に隣接して染井村があり、絵図中に「植木屋多シ」と記されている (図 3)。

2 年後の安永 4 年 1 月 11 日に伊兵衛の店を訪れたときには、「庭を廻り見る、庭中木葉埋み去去年より又々零落」という感想を信鴻は述べている。

安永 3 年 9 月 30 日には、巢鴨 (豊島区巢鴨) の四郎左衛門・八五郎・武右衛門の店に、キクを見に行っている。安永 8 年 9 月 22 日条にも八五郎の名が見えるから、この日も巢鴨だったことになる。弥三郎・次郎右衛門の店も、キクを専門に扱っていたらしい。この地域ではキク栽培を専門にするという傾向がすでに見られる。

#### 2) 太神宮・薬研堀不動 [中央区]

神田塗師町 [ぬしちょう] 代地と松屋町 (中央区八丁堀 3



表－3 その他の地域〔豊島・中央・港・目黒・千代田・新宿・北・墨田区〕の植木屋・花屋

所在地・店名〔( )は経由地〕	現 在 地	年 月 日	購入した樹木・草花
和泉門前花屋 花や伊兵衛 伊兵衛	豊島区駒込	安永2年(1773)11月4日 11月4日 安永4年(1775)1月11日	(立ち寄る) (座敷を借り休む) 「庭を廻り見る。庭中木葉埋み去々年より又々零落」
(和泉境より巣鴨側) 四郎左衛門 (四郎左衛門側) 八五郎 (八五郎の東側) 武右衛門 (稲荷の西から) 弥三郎・八五郎・次郎右衛門	豊島区巣鴨	安永3年(1774)9月30日 9月30日 9月30日 安永8年(1779)9月22日	(菊を見る) (菊を見る) 菊(黄・白・中菊) 小菊
太神宮前(六阿弥陀へ) 薬研堀不動参詣	中央区八丁堀	安永6年(1777)6月18日 安永7年(1778)11月28日	蒲の花(ガマ)・紫陽花(アジサイ) 西玉梅(ウメの一種)
(長坂から) 飯倉の植木屋	港区麻布永坂町	安永6年(1777)12月21日	(立ち寄る。焼けた石燈籠は残る)
金比羅 不動坂植木屋 不動坂花や(神明へ詣る) 不動坂植木屋(富士前へ) (神明へ詣る) 花や	目黒区下目黒	安永2年(1773)1月10日 安永3年(1774)11月30日 安永4年(1775)2月26日 安永5年(1776)1月25日 安永4年(1775)2月26日	(植木を買いに行かせる) 棒桐 (植え込みを見る) 豊後梅棒木 (寄る)
新やしき南の植木屋(大塚へ) (紺屋町・富山丁から) 植木屋(昌平橋へ)	千代田区外神田 千代田区	安永7年(1778)2月15日 6月15日	(立ち寄る) (寒竹等を見る)
(来迎寺・清源寺から) 越後殿前の樹屋	新宿区	安永7年(1778)10月24日	(茶を飲む)
(平塚参詣から) 坂下中里村植樹屋 (近郊へ) 華や二平次(飛鳥山へ)	北区	安永10年(1781)9月24日 安永3年(1774)11月29日	(入って休む) (植溜を見る)
(横川町・ないり橋) 植樹屋(源兵衛橋)	墨田区	安永7年(1778)2月11日	(松を見る)

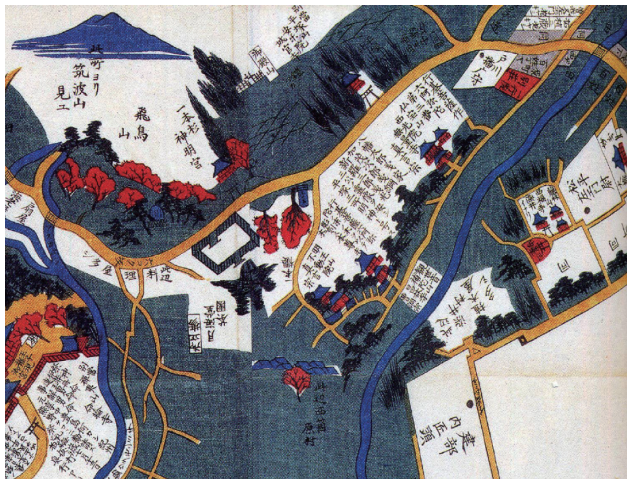
丁目)との間の通りは、伊雑太神宮(いそべたじんぐう、現天祖神社)があったことから、太神宮前と俗称されていた。『江戸名所図会(1)』の図を見ると、伊雑太神宮は小さな社で周囲は商家になっている。「蒲の花・紫陽花」を売っていた店は、おそらく仮設店舗だろう。

薬研堀不動院は中央区東日本橋2丁目に位置していた寺院だが、ここの店も場所からすると、仮設店舗の可能性が高い。

### 3) 飯倉〔港区〕

安永6年(1777)12月21日に、長坂(麻布片町交差点あたりから、新一の橋交差点付近まで)より飯倉へ出ている。植木屋が集まっていたという植木屋坂(港区麻布永坂町)を指すのだろうか<sup>5)</sup>。

飯倉のなじみの植木屋の主人が、火事でことごとく焼けてしまったが、石燈籠などはまぬがれたと語ったと、信鴻は書いている。植溜を持つだけでなく、販売用の石燈籠も置いていた比較的大きな植木屋だったらしい。



図－3 染井・王寺(「染井・王寺・巢鴨絵図」(1854年)より)

### 4) 金比羅・不動坂〔目黒区〕

安永2年(1773)1月10日条の「金比羅」というのは、高幢寺(目黒区目黒)内にあった金比羅権現社を意味している。翌3年11月29日に信鴻は、不動坂(目黒区下目黒)の植木屋、翌々年の4年2月26日には不動坂の花屋を訪れている。

不動坂という名称は、目黒不動が存在したことから付けられたという。『遊歴雑記』(文化11年[1814]序)には、不動尊のおかげで片田舎なのに市中の賑わいがあり、飲酒や食事ができる店がいく軒あったとある。人が集まる所だったので、植木屋も商売をしていたということだろう。

### 5) 富山町一昌平橋〔千代田区〕

安永7年(1778)2月15日に信鴻は、「新やしき」(千代田区外神田4丁目)の南側の植木屋に立ち寄っている。同年6月15日には、J R 神田駅東側付近の富山町(千代田区神田富山町)から、J R 御茶ノ水駅近くの昌平橋までの間で、カンチクなどを植木屋で見ているが、同じ店の可能性が高い。江戸城の外堀の役割を果たしていた神田川の北側に、植木屋が存在していたのだろう。

### 6) 越後殿前〔新宿区〕

安永7年(1778)10月24日には、来迎寺(新宿区喜久井町)と隣接する清源寺(新宿区富山)を過ぎてから「越後殿前」の植木屋に入って休憩している。「牛込・市ヶ谷・大久保絵図」(尾張屋板、1854年)には、来迎寺・清源寺の東側に松平越後守の下屋敷が描かれているから、これが「越後殿」ということになる。隠居したといっても大名だった人物が、路上の仮設店舗で茶を飲むということは考えられない。植溜を持つ植木屋が存在していたのだろう。

### 7) 坂下中里村〔北区〕

天明元年(1781)9月24日に、信鴻は平塚明神社(北区上中里)に参詣してから、飛鳥山東側の坂下中里村の植木屋に入って休んでいる。前掲の「染井・王寺・巣鴨絵図」(図3)を見ると、平塚明神社の周囲は田畑なので、中里村の植木屋は植溜を持っていたと考えられる。

### 8) 横川町一源兵衛橋〔墨田区〕

表－４ 鉢植えの購入

所在地・店 名	現 在 地	年 月 日	購入した鉢植え
金毘羅	目黒区下目黒	安永２年（1773）２月10日	梅鉢殖〔八重児・紫紋十のむめ〕
萱場町	墨田区江東橋	安永２年（1773）３月８日	つはき三鉢〔羅甌・百官・星くるま〕
あたこ	港区愛宕	安永２年（1773）３月24日	つはき二鉢〔緋車・出羽大輪〕
采女原	中央区銀座	安永２年（1773）閏3月4日	楓鉢殖二箇〔青葉・ハシほ・名月〕
（二王門から）太神宮前	中央区八丁堀	安永８年（1779）10月17日	鉢植えへ
広小路植木廊 （黒門から）広小路 （山下から）広小路	台東区浅草	安永２年（1773）12月18日 安永８年（1779）12月20日 12月20日	寒西王母（ウメの一種）一鉢 難波紅梅鉢 福寿草（鉢植え？）
車坂から首ふり坂への途中	台東区谷中―台東区上野公園	天明４年（1784）３月23日	藤鉢うへ
（浅草参詣して）首振阪宇平次 （浅草参詣して）谷中上	台東区谷中	安永４年（1775）７月17日 安永10年（1781）11月18日	夾竹桃（キョウチクトウ）鉢うへ 紅梅鉢植
（伊勢屋に休む）湯島花や （湯島参詣して）女坂植木屋	文京区湯島	安永６年（1777）11月25日 安永８年（1779）12月25日	接分梅鉢 梅鉢植
千駄樹花屋	文京区千駄木	安永10年（1781）３月９日	（鉢植えを見る）
不明		安永２年（1773）12月29日	海石榴（ツバキ）六鉢〔豊後紋・青白・眉間尺・丹鳥・釜山海・乙女〕
不明		安永３年（1774）１月10日	海石榴ハツ〔春日野・鳥の子・白鳴・南京紋・もみこし・限り・玉取・塩かま〕
花屋権兵衛へ 花屋権兵衛	不明	安永３年（1774）１月22日 安永４年（1775）１月１日	梅鉢殖十三・海石榴二ツをやり、他の木を求める 福寿草（鉢？）をもらう
植樹屋庄助	不明	安永10年（1781）10月４日	山茶花（サザンカ）鉢植をもらう
通町通り今川橋焼物や （中町から）茶碗はちや	港区 不明	安永７年（1778）５月３日 ５月14日	「二軒にて植木鉢・蓋物求め」 「植木鉢買はせ」

横川町（墨田区横川町）から「なりい橋」を渡った所の植木屋に寄り、源兵衛橋（墨田区吾妻橋）に行っている。横川町と源兵衛橋の間に、植木屋が存在していたことになる。

2. 鉢植えの購入

（１）上屋敷での鉢植えの収集

安永２年（1773）５月23日に信鴻は六義園に移っているが、それ以前の幸橋内の上屋敷（千代田区内幸町）での生活も、日記には記載している。この時分は作庭も思うようにできない身分だったこともあって、鉢植えに熱中していたらしい。

金比羅・萱場町・「あたこ」（愛宕）・采女原に、使いをやってウメ・ツバキ・カエデの鉢植えを購入している（表４）。金比羅というのは、金比羅権現社（目黒区目黒）のことで、萱場町は現在の墨田区江東橋一帯を指している。「あたこ」は愛宕神社（港区愛宕）のことだろう。采女原は采女町（中央区銀座５丁目）のことで、『江戸名所図会（１）』には「このところに馬場あり。つねに賑はしく、講釈師・浄瑠璃の類、軒を並べて、行人の足をとどむ」と書かれている。この一部に鉢植えを売る店もあったらしい。

表－５ 信鴻が購入した植物

木本類	
常緑針葉樹	キャラボク・マキ・マツ
常緑広葉樹	カシ・カラタチバナ（白実唐橘）・サザンカ・ナンテン・ヒイラギ・ヒメツゲ・モクセイ・モチノキ・ヤツデ
落葉広葉樹	アジサイ・ウメ（豊後梅・うす紅小梅・西王梅）・カイドウ・カエデ（毛氈楓樹・千沙楓・八入楓）・キリ・サクラ（彼岸桜・大膳桜・虎尾桜）・シモツケ・ツツジ（とふたん躑躅）・ハギ（宮城野）・フジ・ボタン・モモ・棘（バラ？）
タケ類	カンチク
草本類	アヤメ（姫菖蒲）・イワヒバ・オモト・カキツバタ・ガマ・キキョウ・キク（白菊・黄菊・小菊・中菊・薩摩菊）・サイシン・セキショウ・セキチク・センノウ（白仙翁）・テッセン・トウガラシ・ハナショウブ・ハラン・フクジュソウ・ホトトギス・ユリ（黒百合・為朝百合・姫百合）

（２）六義園での鉢植えの収集

六義園に移ってからは自由に外出できるようになり、安永３年（1774）１月22日には花屋権兵衛で「梅鉢殖十三・海石榴二ツ」を購入している。安永２年12月18日には広小路の植木屋で「寒西王母一鉢」を買っているが、安永７年11月28日に「西王梅」とあることからすると、寒西王という種類のウメだろう。

（３）植木鉢の購入

なお、植木鉢については、安永７年（1778）５月３日に通町通りの万古〔ばんこ〕焼きの店を訪れた後に、今川橋（本銀町〔ほんしろがねちょう〕２丁目と３丁目の間の橋、現中央区）の「焼物や」２軒で、植木鉢と蓋物を求めている。万古焼きは元文年間（1736－1740）に、伊勢桑名の豪商沼波弄山〔ぬなみろうざん〕が創作した陶器で、赤絵がすぐれていて、文様には異国趣味が著しいという特徴があった<sup>6)</sup>。

今川橋の焼物屋については、『江戸名所図会（１）』は「この橋詰の左右に陶器廊（せとものだな）あり」とし、その図を載せている。万古焼きの鉢も見ていることからすると、飾るための鉢植え用の鉢を探していたことになる。

3. 江戸の植木屋・花屋の特性

（１）植木屋・花屋が販売していた植物

信鴻が植木屋・花屋から購入した樹木・草花をまとめると、表５のようになる。江戸の植木屋と花屋では、多くの種類の樹木・草花を販売していたことがわかる。

信鴻が購入した常緑針葉樹の種類は少ないが、マツはよく探したり買ったりしている。購入した常緑広葉樹は、種類も珍しい品種もなぜか少ない。だが、落葉広葉樹は種類が多く、ウメは「豊後梅・うす紅小梅・西王梅」、カエデは「毛氈楓樹・千沙楓・八入楓」、サクラは「彼岸桜・大膳桜・虎尾桜」といった品種を買っている。草本類は意外と種類が多く、キクとユリには特に興味を持ったのか、「黄菊・白菊・小菊・中菊・薩摩菊」、「黒百合・為朝百合・姫百合」といった品種を入手



している。

植木屋と花屋はさまざまな種類の樹木や草花が並べ、多くの品種をそろえていたことは、江戸時代の園芸文化の水準の高さを示しているといえる。信鴻が庭づくりを楽しんだのは、そうした時代の流れの中でだった。

## （2）植木屋と花屋の違い

現代では植木屋は樹木、花屋は草花を販売しているという違いがあるのだが、『遊宴日記』に見られる植木屋と花屋の違いは、何だったのだろうか。信鴻が植木屋あるいは花屋で、購入したり見たりした植物を挙げると、表6のようになる。このように販売していた植物から比較してみると、植木屋と花屋の区別は不可能に近い。花屋の方が数が少なかったように見えるが、信鴻が明記していない場合が多いので、実際はどうだったかわからない。

花屋という名称からすると、安永5年（1776）6月18日条にある棧崎（三崎）の店のように、生花を販売するというのが当初の花屋の姿なのだろう。安永6年12月21日条にある飯倉の植木屋が、販売用の石燈籠も置いていたことからすると、植木を売るだけでなく、庭をつくることも多かったのが植木屋だろうか。

ところが、安永8年3月26日条によると、千駄木の植木屋はクロユリやサイシンのような草花まで販売している。その一方、動坂の花屋は植溜も持っていて、ここの花屋治衛門は安永7年7月5日条によると、マツまで売っている。売れるものは何でも売るといいたくましい商魂から、植木屋も花屋も扱う種類が増加していき、互いの領分に食い込んだのではないだろうか。

## （3）庭木と鉢植えの違い

信鴻が入手した鉢植えの植物を区分すると、表7のようになる。鉢植えは、常緑広葉樹はキョウチクトウ・サザンカ・ツバキ、落緑広葉樹はウメ・カエデ・フジ、草本類ではフクジュソウしかないというように、かなり好みがはっきりしている。

だが庭木としては、ツバキの購入はなく、ウメ・カエデ・サクラの珍しい品種を買っているにすぎない。鉢植えは身近に置くために花の品種の違いを楽しむが、庭木は園池・築山・石組・建物などとの均衡を考えて配置するという性格のために、あまり品種を問題にしなかったということではないだろうか。

鉢植えを販売していた店を見ると、広小路や湯島女坂の植木屋や、千駄木の花屋がある。植木屋も花屋も鉢植えを扱っていたことになる。

## （4）植木屋・花屋の分布状況

『遊宴日記』からは安永2年（1773）から天明4年（1784）の間に、江戸には植木屋あるいは花屋が、現在の文京区では動坂・湯島・千駄木、台東区では広小路・六阿弥陀・首振坂に多く、そのほか豊島区では染井、中央区では太神宮、港区では飯倉、目黒区では不動坂、千代田区では新やしき、新宿区では松平越後守の下屋敷前、北区では中里村、墨田区では横川町から源兵衛橋の間などに存在していたことがわかる。

『遊宴日記』に登場する店は、信鴻が居住していた駒込の下屋敷六義園に近い場所だったり、浅草寺や湯島の天神・聖堂に参詣した際に立ち寄りたりしたもので、かなり片寄りがある可能性もある。古い史料と比較しておこう。

江戸の植木屋の所在地については、元禄3年（1690）に刊行された『増補江戸惣鹿子名所大全（5）』の「諸職諸商人有所」の項に、

植木や 一 下谷池のぼた（下谷広小路、台東区上野公園）  
京橋長崎町広小路（中央区八重洲・京橋） 三島町神明前（港区芝大門） 駒込染井（豊島区駒込） 四谷伝馬町（新宿区四谷） 其外所々に有といへども不計〔かぞえざる〕なり。

表－6 信鴻が植木屋・花屋で購入あるいは見た植物

	植 木 屋	花 屋
木本類		
常緑針葉樹	マキ・マツ	マツ（樺松）
常緑広葉樹	カシ・モクセイ・モチノキ	モクセイ・ウメ（梅樺木）・モチノキ
落葉広葉樹	ウメ（うす紅小梅・つぎ分梅・豊後梅樺木・梅樺木・豊後梅・紅梅・汐楓）・カエデ（千汐楓）・キリ（椿桐）・サイカチ・サクラ（枝垂桜・彼岸桜・大膳桜）・ドウダンツツジ・ハギ（宮城野）	カエデ（毛氈楓樹）・シモツケ・ハギ（宮城野萩）・ボタン・モモ
タケ類	カンチク	
草本類	キク・サイシン・セキシヨウ・フクジュソウ・ユリ（黒百合）	イワヒバ

表－7 購入した鉢植え植物

木本類	
常緑広葉樹	キョウチクトウ・サザンカ・ツバキ（羅氈・百官・星くるま・緋車・出羽大輪・豊後紋・青白・眉間尺・丹鳥・釜山海・乙女・春日野・鳥の子・白鳴・南京紋・もみこし・限り・玉取・塩かま）
落葉広葉樹	ウメ（八重児・紫紋十のむめ・寒西王梅・難波紅梅・紅梅・接分梅）・カエデ（青葉・ハシは・名月）・フジ
草本類	フクジュソウ

と書かれている。これを受けて、寛保（1741－1743）から延享（1744－1747）までの江戸市中の風俗を記した『日本国花万葉記（3）』の「江戸名匠所職商人」（巻7下）の項には、「湯島」（文京区湯島）が書き加えられている。

『遊宴日記』との関連をみると、『増補江戸惣鹿子名所大全』の下谷池之端は六阿弥陀辺の植木屋のことで、三島町神明前は飯倉の植木屋との関わりがあるかもしれない。駒込染井は伊兵衛などのこと、湯島は湯島天満宮の周辺の植木屋・花屋ということになり、時代が近いだけによく合致している。京橋長崎町広小路は元禄3年に廃されたために、信鴻の時代には町並みがつくられて植木屋はなくなっている。

動坂・千駄樹・不動坂などには、植木屋・花屋の両方がいたことは明確なのだが、湯島の場合などは日記に花屋だけしか記されていない。樹木を販売していたことからすると、植木屋も存在したと考えられるのだが確証がない。その他の場所もどちらか片方だったりするのだが、『遊宴日記』だけから判断することは難しい。

## （5）仮設店舗と常設店舗

問題は植木屋・花屋の店舗が、常設か仮設かということになるだろう。植溜あるいは庭園を持っていたのが明確なのは、動坂花屋や鰻堤の植木屋、谷中首振坂の宇平次、染井の花屋伊兵衛、飯倉の植木屋で、室〔むろ〕を持った千駄樹の植木屋も当然土地を所有していたことになる。六義園の門前の植木屋庄八は自分の土地をもっていただろうし、信鴻が入って休んだ越後殿前や中里村の植木屋は建物を持つ以上、敷地も所有していただろう。土地は借地という場合もあるだろうが、意外と植木屋・花屋は資産家だったと推測される。

植木市の日に店を出していた湯島天神付近の花屋や浅草寺前の広小路の植木屋、火除地〔ひよけち〕のような人が集まる大通りだった六阿弥陀の植木屋などは、仮設店舗だった。太神宮前・薬研堀不動尊・目黒の金毘羅権現社などの店も、参拝客を見込んでの仮設店舗だっただろう。こうした小売業者たちは、植木・草花を江戸周辺から仕入れていたと考えられる。

## おわりに

江戸時代の中期後半（18世紀）の植木屋・花屋の状況は、これまでよくわからなかったのだが、『遊宴日記』の克明な記



載によって、江戸の植木屋と花屋の所在地・特性を明らかにすることができた。

分布状況を総合的に判断すると、浅草寺や湯島天神などでは参拝客を相手に、上野周辺では寛永寺をはじめとする寺社の参拝客や不忍池にあつまる行楽客を対象に、植木屋・花屋が仮設の店舗を開いていたことになる。また、駒込・動坂・千駄木・根津・本郷の一带や巣鴨周辺では、敷地を持った植木屋・花屋が常設の店を営んでいたことがわかった。

今後は江戸時代後期（19世紀）に、江戸の植木屋と花屋がどのように変化していったのかを、調べていきたいと思う。

#### 参考文献

- 1) 『遊宴日記』は西山松之助・服部幸雄編『日本庶民文化史料集成（13）』（三一書房、1975年）に収録されている。
- 2) 小野佐和子：柳沢信鴻の隠居所としての六義園、ランドスケープ研究 62-5、p.417-422、日本造園学会、1999
- 3) 「東駒込辺絵図」は牧野洋編『別冊歴史読本（52）江戸切絵図』（新人物往来社、1994年）に収録されている。以下の切絵図についても同様。
- 4) 平凡社地方資料センター編：日本歴史地名大系（13）東京都の地名、p.534、平凡社、2002  
以下、江戸の地名については本書に依ったので、参照願いたい。
- 5) 山野勝：江戸の坂、p.40、朝日新聞社、2006
- 6) 新村出編：広辞苑、p.2202、岩波書店、2006